

サンゴ礁を含む海洋資源の問題は、広大な海を共有する地域全体で取り組むべき課題。そのような声の高まりから、06年、ミクロネシア諸国（パラオ、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国、米領グアム、北マリアナ諸島）は「ミクロネシアチャレンジ」を発表。2020年までに、ミクロネシア地域の近海域の30

「保護区を設けても、放置しては意味がありません。定期的にサンゴ礁の変化をモニタリングし、異変があれば、早急に対処することが大切」と中谷誠治 JICA 専門家。周辺地域の住民にも、保護区の設置による生活の変化などをヒアリングする計画だ。

またプロジェクトでは、ミクロネシア地域で利用・応用が可

パラオを拠点に モニタリングの基盤を作る

パラオの発展のためにも開発は重要。しかし、人々の生活を支え、観光資源となっているサンゴ礁が破壊されてしまつては意味がない。そこで2001年、日本の協力で「パラオ国際サンゴ礁センター（PICRC）」を設立。サンゴを含む海洋資源の保全・研究の拠点として、JICA は PICRC の運営能力の強化、青年海外協力隊による環境教育などの支援を行ってきた。

この「チャレンジ」には何が必要か。そこで、パラオがそのカギとして打ち出したのは「海洋保護区の設置・管理」だ。そもそも、開発や漁獲、観光活動を制限するために設置される海洋保護区。現在、パラオにも34の保護区があるが、予算や技術面の不足から、十分に管理が行き届いていないのが現状だ。

サンゴ礁を効果的な方法でモニタリングし、保護区を適切に設置・管理する。JICA はこの目標を達成すべく、09年7月に PICRC を拠点に「サンゴ礁モニタリング能力向上プロジェクト」を開始。パラオ国内で優先度の高い保護区を選定し、モニタリングの準備を進めている。

み、サンゴの呼吸や光合成を妨げているのだ。そのほかにも、天然林の農地への転換、無秩序な漁法や乱獲など、さまざまな人為的要素が重なり合い、サンゴ礁の生態系が危機に瀕している。

%、陸地の20%の効果的な保全を達成するという目標を打ち出した。

この「チャレンジ」には何が必要か。そこで、パラオがそのカギとして打ち出したのは「海洋保護区の設置・管理」だ。そもそも、開発や漁獲、観光活動を制限するために設置される海洋保護区。現在、パラオにも34の保護区があるが、予算や技術面の不足から、十分に管理が行き届いていないのが現状だ。

パラオの海底に育つサンゴには、自然にさまざまな魚が集まってくる



美しいサンゴ礁の 背後に潜む危機

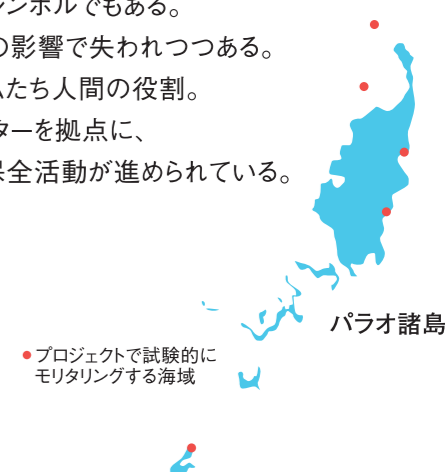
青い海は、世界中の誰もが魅せられる神秘的な空間。そして一面に広がるサンゴ礁は、この広大な空間に彩りを添えている。

サンゴ礁は、いわば海の守り神。単に美しいだけでなく、海洋生物の貴重なすみかとなり、巨大な漁場としての役割を果たす。そして時には、高波を抑える防波堤にもなり、私たち人間を災害から守っているのだ。

大洋州に浮かぶ島国パラオで

“海の守り神”を救いたい

海底に広がるサンゴ礁は、南国のシンボルでもある。しかし近年、この光景が、気候変動や開発の影響で失われつつある。世界の海に美しさを取り戻すのは、私たち人間の役割。現在、パラオ国際サンゴ礁センターを拠点に、JICAの協力でミクロネシア地域のサンゴ礁保全活動が進められている。



パラオ諸島

プロジェクトで試験的にモニタリングする海域



PICRCは、日本の無償資金協力により2001年に開館。水族館を併設し、研究機能だけでなく住民への環境教育にも力を入れる

も、大小500以上の島々をサンゴ礁が取り囲み、400種以上のサンゴが生息する。その美しい空間を一目見ようと、毎年、世界各国から多くの観光客が訪れている。パラオ政府もこの豊かな自然環境を利用した「観光」を経済発展の柱とし、積

極的に開発を進めてきた。しかし近年、このサンゴ礁を取り巻く環境に、ある変化が起こっている。

「魚の種類がすっかり減ってしまつてねえ。小さな魚しか獲れなくなつたんだ」

パラオの海を見てきた島の漁師たちは、口ぐちに言う。そう、魚たちのすみかである、サンゴ礁の生態系の破壊が進んでいるのだ。

その原因は言うまでもない、私たち人間にもある。開発のため次々とホテルが建設され、道路が整備された。その結果、切り崩された土砂が海に流れ込

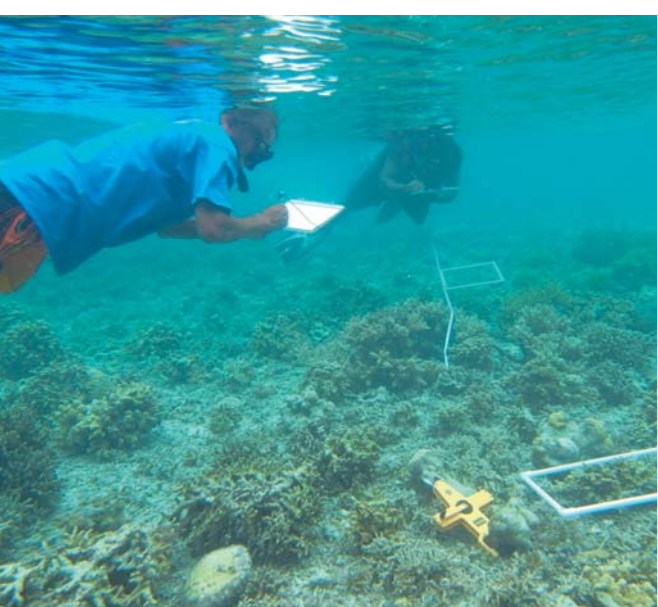
能な「サンゴ礁モニタリンググループ」の作成にも取り組む。PICRCでは、対象保護区の選定、住民・関係者への啓発から、モニタリングの目的やポイント、収集したデータを保全活動にどう生かすべきかなど、その一連のノウハウを一冊にまとめるために、「ワークシヨップ」を通じて各国の担当者や意見交換を行っている。「同じミクロネシアといつても、国によってニーズは異なります。地域全体で活用できるものにするためには、各国が抱える問題をよく理解する必要があります」。

「パラオの人たちは、自分たちのもの」としてサンゴ礁を守

らなければという信念があります。JICAが彼らのポテンシャルを引き出し、後押ししていければ」と中谷さん。さらに、「実は沖繩のサンゴ礁も、かなり危機的な状態にある。私たち自身もミクロネシアの人たちと共に学び、現状と向き合っていかなければならない」と、私たち日本人にも警鐘を鳴らす。

人間の心と海の生物の生命を、優しく包み込んできたサンゴ礁。今度は私たちがこの海の守り神を救う番だ。PICRCが拠点となり、今後、ミクロネシア地域のサンゴ礁の保全活動がより効果的に進んでいくことを期待したい。

(上)潜水調査を通じて、海洋保護区のサンゴ礁の状態をモニタリングするための訓練を実施。「次の課題は、データの定期的な収集とデータベースの構築です」(下右)モニタリング準備のため、州のレンジャーと打ち合わせをする中谷さん(下左)サンゴ礁のモニタリング方法について、PICRCのスタッフが中谷さんらJICA専門家の指導の下、ミクロネシア地域の保護官らを対象に講義をする



※プロジェクトの詳細は、英語のホームページ(www.cepcrm.org/)へ。